

— うけとれますか？子供のシグナル —

熊本大学医学部小児発達学教室

友田 明 美



■ 略歴

昭和62年 熊本大学医学部卒業
熊本大学附属病院発達小児科入局
昭和62年～平成2年
鹿児島市立病院小児科、熊本市市民病院小児科
北九州市立総合医療センター小児科勤務
平成4年 熊本大学医学部（発達小児科）文部教官助手

出生率の減少により学童数は減ってきているにもかかわらず不登校は年々増え続けており、文部省調査では小・中学生で1年間に約9万人、高校中退は十数万人とも言われている。更に病気として処理されている人達や保健室登校者、登校してはいるけれど授業には殆どついていけない人達も含めると事実上の不登校状態にある生徒達はこの数倍存在すると思われる。一方、一般小児科外来で認められる不登校児に見られる症状(シグナル)は全身倦怠感(疲れやすい)・頭痛・腹痛・微熱・肩凝り・大腸過敏症状(下痢と便秘の繰り返し)・睡眠障害(熟睡できない、昼間に眠ってしまう)・集中力や思考力の低下などいわゆる不定愁訴と呼ばれるさまざまな自律神経失調症状で、殆どの不登校児に共通している。私達はこれまで、彼らの糖代謝、間脳下垂体機能(体温調節機能、睡眠覚醒リズム)に問題があり、終夜脳波や脳血流(スペクト)にも異常が見られることを報告し、不登校状態にある子供たちの身体に「時差ボケ」に類似した病的状態が存在することを報告してきた。学校という教育の場で彼らが心身とともに疲れ果てていく現実に遭遇するにつけ、私は一小児科医として危機感をぬぐい去ることができない。次世代をになう子供たちを見守る私たちは、彼らのシグナルを早期に察知して予防し健康を守る義務があると考えている。

今回、日常生活での子供たちから出るシグナルへの対応や彼らを取り巻く学校関係者・家庭との連携について討議したい。